

烏森トレッキング回想記

第二十一回

日 時：'09.5/9(土)

概略行程：鎌倉～鶴岡八幡宮～建長寺～天園山ハイキングコース(半僧坊)～十王岩～百八やぐら～鎌倉宮～鶴岡八幡宮～江ノ電鎌倉～長谷駅～由比ヶ浜～高德院(鎌倉大仏)～長谷寺～長谷駅～江ノ電藤沢駅

メンバー：米本、吉川、小林、森、磯崎

春の計画を愚図っている内、小林氏より日帰りによる鎌倉散策の案内を受ける。何年振りの鎌倉かと記録を辿ると、'95.8以来の14年振り、鶴岡八幡宮、建長寺、大仏、銭洗弁天、湘南の海、ヨットハーバー、江の島、レンタサイクルと記憶が蘇る。

先行して、早朝の北鎌倉駅に下車。

学校が集まるのか、通学生の波に押され、建長寺の門前辺りでやっと列から外れ、時代に取り残された人かの様にポツネンと佇み、心の中は過去の記憶との照合作業、“色は違えど、記憶する風景”と安堵する。

開門時には、なお早く、外人カップルがサイクリング車で乗り付けるのを機に、駅西口に回り、鎌倉街道を鎌倉駅方向に線路沿いに歩き始める。

途中、再度、学生の流れに合流するが、道路の右手側を歩き、マイペースを確保、我が姿は彼等の眼に如何が映っているのか。

右手に亀ヶ谷坂の道を見つけて、迷わず右折、向かう先は不明も、時間はたっぷり、案内書で見た切り通しの道かと思いながら、急坂を上る。

静寂の道脇に、石段の奥先に玄関を構える旧家屋を見遣り、川沿い、横須賀線沿いの通りに出会う。民家の庭には春の花々が溢れ、ひとつひとつ愛でながら、鎌倉駅を目指す。

道を間違い、遠回りするも、何とか鎌倉駅に到着。

駅前賑わい、併設する江の電駅も確認するが、かつて利用したレンタサイクル店は見当たらず。余りの風景の違いに驚き、一瞬、時の流れかとも思うが、直ぐに駅裏と確信し、横断路を探す。

ここでも、道を遠回りし、やっと鎌倉駅西口に到着。レンタサイクル店も健在で、過去の記憶が一気に一致。駅前ファーストフード店に入り、コーヒーを飲む。

混雑する中央改札口前で、小林、森両氏と合流、吉川氏は午後から、米本氏は夕刻からの参加と聞く。

鎌倉幕府成立の年1192(いいくに)を反すうしながら、参道を歩いて鶴岡八幡宮へ。

源頼朝、義経でもって走馬灯を回している内、中学生時代に演じた弁慶勸進帳を読む場も浮かび上がり、つつい苦笑。

広い境内は参拝客で溢れ、老若男女が喧々譁々、古都の晩春に酔いしれるかのように。

本堂で合掌する森氏を見遣り、鎌倉市街を遠望したり、次に向かう建長寺への道を探ったりと世俗に動く。

神宮脇を抜けて、広い通りを歩き建長寺へ。

神仏混淆、両者の相違も解らず、往時の執権者の威勢振りや統治の工夫振りに想いを馳せる。境内三門脇の梵鐘は国宝に指定されている由、つらつら眺めるも、その価値解らず。

天園山ハイキングコース入口を探し、奥へ奥へと歩き、半僧坊へと辿り着く。

供えられたベンチに座り、先ずは一服、行き交う人の多さに、コースの人気振りを知る。

【余談58】“鎌倉アルプス”は、以前から気になっていたハイキングコースの一つである。あの鎌倉にと、今一つ判然としなかったが、どうやら、今回の天園山コースや源氏山コースを含めた、鎌倉地区丘陵の総称のようである。

“沼津アルプス”、“神戸アルプス”、更には、“長瀬アルプス”と喧しいが、雑誌メディアに踊らされ過ぎないように。

ハイキングコースに入るや、直ぐに山道となり、小高い丘からは急な下り、水ぬかる道は滑りに要注意と、足下を確かめながら、笹の道や岩場の道を慎重に進む。

時折、開ける展望に、明るい鎌倉市街を遠望。

行き交う人は多いが、道は意外に人の手が入っておらず、かつては兵や刺客達が徘徊していたのではと想いを馳せたりもする。

木標の立つ分岐路に到着。

吉川氏との待合せ時間を考え再協議、進路を変更して、太平山行きを断念、鎌倉宮へと下山する。

鎌倉宮の無料休憩所に入り、昼食。

火器の使用は言語道断と、カップ・ヌードルを断念して、駅前調達のコンビニ弁当で済ます。晩春の古都片隅に休み、それぞれの近況を語り合う。

鶴岡八幡宮に向かい、歩きを再開。緑に包まれた滑川沿いに歩道を探すが、行き止まりばかりで、止む無く車道を歩行、やがて八幡宮の参道に出会う。

太鼓橋の袂で吉川氏と合流、午後の行動を詮議する。予定した源氏山ハイキングや銭洗弁天行は断念し、江ノ電で長谷に移動を決めるが、森氏は別の約束で、鎌倉駅で別れる。

満員の車内はすでに夏の色。

乗客は涼風を求めてクーラー下に集まるが、何と国際色豊かと思嘆する。

【余談59】経済のボーダレス化は外国人との出会いを日常化するばかりか、風景まで一変している。以前見掛けた彼等は観光客であり、ビジネスマンであり、目撃箇所もほぼ限定されていた。

ところが今やどうだ、多くの外国人が集まる六本木や町工場、飲食店で出会う東南アジア、東アジアからの労働者には驚かないが、何とも戸惑うのは自宅近くで出会う彼等である。

麻布の外人向けスーパーではなく、名ばかりスーパーで、実体は街の八百屋さんでもあるディスカウント店のレジにニコニコ顔で並び、隣接マンションには、エリートである筈の金髪住民が居住し、用向きは不明であるが、通勤時の毎早朝に擦れ違う、短パン姿で眼の青い初老外国人。ひょっとすると、その内、彼等は町会にも出席し始めるのではと苦笑する。

大仏寺、「高德院」への最寄り駅、長谷駅で下車。

まずは、湘南の海を眺めながら珈琲なんぞをと、南の「由比ヶ浜」へ向かう。

眼前に相模灘が拡がり、その向こうには太平洋。左手先には三浦半島が伸び、右手には橋で繋がる江の島。

浜辺では、晩春の強風を受け、サーフィンを楽しむ人、凧上げを楽しむ人で賑わう。

壊れた木舟に腰を掛け、体を風除けにして、舟底木組みの間で湯を沸かす。

道を戻って、「高德院」へ。

駅を通り過ぎて、更に、北に進む。広い通りは車が行き交い、狭い歩道は往く人、帰る人で溢れ返り、何とかならないものかとの苛立ちを、天麩羅屋親父の楽しい店頭口上に耳をそば立てて凌ぐ。

【余談60】後日、ラジオで知る。某観光地で道の渋滞策に往路復路を決めた所、往路沿いの店の売上高が激減した由。

理由は簡単、荷物となる土産物を往路に買う人が少ないため、直ぐに元に戻した由、むべなるかな！

門脇の木戸口をくぐり、拝観料を納めて入場。

玉砂利を敷き詰めた境内の中央正面に、五月の青空を背に大仏が鎮座し、その周囲を、来観者が取り囲むが、無表情な大仏に比し、眼の上に手を翳したり、携帯カメラを掲げたりと、何とも忙しい人々達。

玉砂利の敷き詰められた境内を一周し、大仏の臀部左側に体内進入口の存在を確認。入体料は50円と記憶する。

奈良 / 東大寺、千葉 / 日本寺大仏との背比べが話題になるが、当寺から3, 2, 1の順。

高德院を後にし、紫陽花寺として知られる長谷寺に立寄る。

自然石を敷いた石段を順路通りに進み、展望台を置く最上部まで登るが、紫陽花は葉影すら見せず。

机を並べた休憩所からは、先ほど珈琲を沸かした由比ヶ浜が一望でき、しばし、夕泥む湘南の海浜風景を楽しむ。

【余談61】後に、鎌倉案内で知ったが、長谷寺の紫陽花は奥のある個所に群生している由。しかし、小生がイメージした紫陽花寺は、院の至る所が紫陽花の花で埋まり、傘を打つ雨音さえ楽しい、水滴る花寺であった。

江ノ電に乗り、最終の訪問先、藤沢へ。ここで、米本氏が自宅から合流。

駅前の洒落た焼き鳥屋に入り、喉を潤すが、幹事の気配りも届かず、齋木会頭はここも欠席する。